

Title	読み始められた〈新しい思考〉：フ란ツ・ローゼンツヴァイク『救済の星』の邦訳出版に寄せて
Author(s)	佐藤, 貴史
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-3 : 10-14
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=2329
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

読み始められた〈新しい思考〉 —フランツ・ローゼンツヴァイク『救済の星』の邦訳出版に寄せて—

佐藤 貴史

はじめに

フランツ・ローゼンツヴァイク (Franz Rosenzweig, 1886–1929) の大著『救済の星』(村岡晋一・細見和之・小須田健訳、みすず書房、2009年) の邦訳がついに出版された。かつてジョージ・スタイナーがエルンスト・ブロッホの『ユートピアの精神』(1918) やカール・バルトの『ローマ書注解』(1919) とならべ、カール・レーヴィットがマルティン・ハイデガーの『存在と時間』(1923) と比較した書物である。あまりに難解で出版された当時、ほとんどの人に拒絶されたとローゼンツヴァイク自身が漏らし、自らそのための手引きをもう一度書かざるをえなかった書物——『救済の星』とは何か。

筆者の知る限り、これまで(2009年8月23日現在) 3人の評者によって4つの書評〔合田正人『週間読書人』(2009年6月19日)、「哲学の終焉と新しい思考」『思想』(岩波書店、No. 1023、2009年7月)、早尾貴紀「他者との共生の思想的先駆」『環』(藤原書店、Vol. 38、2009年)、三島憲一『図書新聞』(2009年8月1日)〕が書かれたようである。この研究ノートでは、いまあげた3人の書評を踏まえたうえで、『救済の星』はいかにして読まれうるのか、あるいはわが国において読み始められたのかという〈解釈の可能性〉を、最近の研究動向なども視野に入れながら簡潔に報告してみたい。

1. 対話/差異の哲学者としてのローゼンツヴァイク

訳者の一人、村岡晋一氏による「訳者あとがき」はローゼンツヴァイクのプロフィールのみならず、『救済の星』の内容についても、それぞれの巻に即して説明している。村岡氏は『救済の星』を「対話の哲学」として読む方向性を示しているが(次の村岡氏の著書も参照されたい。『対話の

哲学 ドイツ・ユダヤ思想の隠れた系譜』、講談社、2008年)、村岡氏がすでに書いているように、このようなローゼンツヴァイクの読み方はドイツにおいて1960年代から始まった研究動向である。とりわけ*Das dialogische Denken* (1968) をはじめとするBernhard Casperのローゼンツヴァイク研究は、彼の*Religion der Erfahrung* (2004) にいたるまで重要な役割を果たしており、そこでは「対話の哲学」や倫理の問題が精力的に論じられている。

このようなローゼンツヴァイクの〈新しい思考〉のうちに「対話の哲学」を読み込む可能性は3人の書評者によっても指摘されている。合田氏はこの問題を現代思想やシステム概念の関係において捉え、三島氏は言語という通路を通して「道具主義的理性を越えたコミュニケーション的理性への転換」が用意されていることを指摘する。

ただ『救済の星』を「対話の哲学」として読む視点に対して、早尾氏がその限界について記していることは興味深い。早尾氏によれば、「ローゼンツヴァイクの共生論の対象はあくまでキリスト教徒」であり、「彼がドイツ・ユダヤ人として対話すべき他者」として承認したのは「ヨーロッパのキリスト教徒、ドイツのキリスト教徒」だけであった(「他者との共生の思想的先駆」、348–349頁)。ここに「対話の哲学書としての『救済の星』の限界が露呈されている」(同上、349頁)、と早尾氏はいふ。このような指摘に筆者も賛成であり、例えば*Rosenzweig and Heidegger* (2003) を著したPeter Eli Gordonもまた同様の見解を示している。Gordonはローゼンツヴァイクが「全体論者」(holist)であったことや彼の共同体論からみて、ローゼンツヴァイクをエマニュエル・レヴィナスと結びつけたり、「対話の哲学者」として読むことに慎重であろうとする(*Rosenzweig and Heidegger*,

9-12, 199-200)。筆者も以前、ローゼンツヴァイクの〈新しい思考〉には既存の倫理を解体するような局面が含まれていることを指摘したことがある（「瞬間と解体——H・コーエンとF・ローゼンツヴァイクにおける啓示と倫理——」）。ところでローゼンツヴァイクとレヴィナス、あるいはローゼンツヴァイクとジャック・デリダの関係といった現代思想にとって重要なテーマをさらに拡張し、指摘したのが次の合田氏の書評である。

2. 現代思想の源泉としてのローゼンツヴァイク

ローゼンツヴァイクは『救済の星』を「一つの哲学体系」と呼び、その目次は非常に均整の取れたつくりでありながらも、合田氏によれば『救済の星』は「筋立てを辿ることの難しい断章の不連続性」、「それらのラプソディ（仮縫い）」という言葉で表現されるのが相応しい書物である。ほとんどすべてといってよいほどのローゼンツヴァイク研究者が、『救済の星』の複雑な内容と論理展開に辟易するが、合田氏は論文「新しい思考」を踏まえて、そこから現代思想へとつながる鍵概念を導き出す。ローゼンツヴァイクが、ベルクソンと異口同音に「常識」への回帰を主張していることはきわめて重要な指摘である（この問題に関しては、われわれはローゼンツヴァイクの*Das Büchlein vom gesunden und kranken Menschenverstand*を読まなければならない。ちなみにこの小さな本の英訳に序論を寄せているのはHilary Putnamであり、彼の近著*Jewish Philosophy as a Guide to Life*も参照すべきである）。

またローゼンツヴァイクの「メタ」概念から「神」「世界」「人間」というそれぞれの項のうちにありながらも同一化できない「余剰」、「非同一性」の議論に進み、テオドーア・W・アドルノの「否定弁証法」との連関が示唆される。さらには「と」（und）という根源語や新しい「システム」概念からアドルノの「パラタクシス」論やジル・ドゥルーズ&フェリックス・ガタリの議論が思い起こ

されるという。これらの合田氏の指摘は、現代思想に疎い筆者にとって嬉しい報告であった。ただシュテファン・ミュラー＝ドームの重厚な作品『アドルノ伝』を読むと、アドルノはマルティン・ブーバーやローゼンツヴァイクを「露骨に敬遠」していたとある（シュテファン・ミュラー＝ドーム『アドルノ伝』、29頁）。伝記的な事実が、思想的親和性を否定するわけではまったくないが、もし両者のあいだに関係があったならば、そこにはいかなる出会いと離反があり、アドルノが『救済の星』から何をすくい上げ、何を捨て去ったかは気になるところである。

最後に、やはりシェリングの思想が当時の思想家に与えた影響についてより詳しい考察が要求されるだろう。合田氏は『救済の星』のなかから「シェリングの後期哲学の軌道上」（『救済の星』、25頁）という言葉を用いし、ローゼンツヴァイクとシェリングの関係に注意を払っている。1920年から30年代にかけて、ローゼンツヴァイクのみならず、プロテスタント神学者のパウル・ティリッヒが、ハイデガーが、そしてフランスではジャンケレヴィッチがやはりシェリングの哲学を論じていた。なぜあの時代、出自も違えば、お互い会うこともなかった若き思想家たちのあいだで、かくもシェリングが話題になったのか。さらに掘り下げるべきテーマである。

3. 危機の思想家としてのローゼンツヴァイク

三島氏の書評は、ゲルシヨム・ショーレムの引用——「歴史的現象としての神秘主義は危機の産物である」——から始まる。まさに『救済の星』は、三島氏によれば「究極の神秘主義」である。しかし、ローゼンツヴァイクの神秘主義は、自閉的で孤立した神秘主義ではなく、しかも一方で「ユダヤ民族の絶対的特別性」を説いているにもかかわらず、「いわゆる民族主義とは無縁の普遍的合理主義」に到達する。神の愛によって呼びかけられた人間は、その愛のなかで「二人称」に転じ、

そのとき言語はあらゆる境界線を越えていく。ローゼンツヴァイクにおける「神の愛」や「言語」の問題は、彼の啓示論に直結しているが、三島氏は啓示論を正当にも創造論と救済論との関連においてとりあげている。ローゼンツヴァイクの〈新しい思考〉の核にあるのは、彼の啓示概念であることはローゼンツヴァイク研究者が一致するところである（次の研究を参照されたい。Martin Fricke, *Franz Rosenzweigs Philosophie der Offenbarung: Eine Interpretation des Sterns der Erlösung*。また著者はローゼンツヴァイクの「経験する哲学」を、啓示を「経験する哲学」と解釈したことがある。「現実性と真理——フランツ・ローゼンツヴァイクの経験論——」）。神の啓示、愛の言語が人間に他者を求めさせる。そして同時に、それは人間に対して過去・現在・未来という時間を開示する。その意味では、ローゼンツヴァ



フランツ・ローゼンツヴァイク(1886-1929)
(Internationale Rosenzweig-Gesellschaftより提供)

イクの啓示論は認識論としても読まれなければならない。

それにしてもローゼンツヴァイクとキリスト教の関係は、どのように理解したらよいのだろうか。一見すると、自らもキリスト教へ改宗する一歩手前までいったことが示しているように、ローゼンツヴァイクはユダヤ教と同等の地位をキリスト教に与えているように読める箇所も多々ある。とはいえ、Gordonは「ローゼンツヴァイクは、キリスト教を歴史の『途上』にとどまっているがゆえに、いまだ永遠性を経験しない『中間時の』状態(a “between” condition)として描いている」

(*Rosenzweig and Heidegger*, 208) という。ここから彼はキリスト教徒に対する「ユダヤ人の存在論的優位」(Ibid., 207)を導き出す。ただ三島氏やレヴィナスが書いているように、ローゼンツヴァイクのユダヤ民族論は「血縁ナショナリズム」と何の関係もない。むしろ、ローゼンツヴァイクにとってユダヤ民族は「無力」であってかわらないし、それこそが「残りの者」としてのユダヤ民族の特権であるかもしれない。このような議論を踏まえると、『救済の星』はきわめて「非政治的な」書物にみえてくるし——「……国家と世界史にとって、永遠の民族の真の永遠性はつねになじみのない、不愉快なものにとどまらざるをえない」(『救済の星』、524頁)——、事実そのように論じられてきた。

しかし、本当にそうだろうか。三島氏は、書評の最後で「ローゼンツヴァイクは、危機の中でモラルの回復を説くお説教家ではない」と書いている。さらに続けて、「ベンヤミンと同じく、現代社会論的には当然のことながら個人主義的左翼になる」という言葉で書評を結んでいる。ローゼンツヴァイクを読むコンテクストとしての「危機」とは何であろうか。「ベンヤミンと同じく」という表現のうちに重要な視点が提示されているように思える。管見によれば、その一つのコンテクストは「歴史主義/反歴史主義」ではないだろうか。

ベンヤミンと同様にローゼンツヴァイク、プロテスタント神学者のバルト、そしてティリッヒが、生成する歴史のなかで既存の価値が相対化され、学問の自明性が掘り崩されていく、あの「危機」に直面しながらお利口さんの「モラル」や優等生の「文化」を説いていたわけではけっしてない。政治を政治とは異なる語彙や象徴でラディカルに語りながら、彼らは時代に深く食い込んでいった。〈新しい思考〉における〈政治的なもの〉に焦点を当てる研究（Jörg Kohr. »Gott selbst muss das letzte Wort sprechen...« Religion und Politik im Denken Franz Rosenzweigs）も出てきており、「対話の哲学者」ローゼンツヴァイクという称号は無条件には当てはまらないところまでできているといえよう。

おわりに

合田氏は、『救済の星』が「ユダヤ教の書物」でも「宗教哲学の書物」でもないことを指摘したうえで、「評者自身は、ローゼンツヴァイクとスピノザとの連関をできるだけ詳細に検討しなければならないとも思っている……」（『哲学の終焉と新しい思考』、239頁）と書いている。この両者の関係がどのように論じられるべきかは筆者にはわからない。しかし、レオ・シュトラウスの問題意識を通してローゼンツヴァイクを読むとき、合田氏の指摘が非常に重要なものに思えてくるのである。

1935年、シュトラウスは『哲学と法』という書物を出版した。啓蒙主義と正統派の争いは啓蒙主義の勝利に終わったように考えられているが、本当にそれは正しいのか。シュトラウスは、あえてそう問う。いや、「急進的な啓蒙主義」も「正統派」もまだ今日においても生き延びており、むしろ「啓蒙主義と正統派の論争」は「取り戻されなければならない」のではないか（*Philosophie und Gesetz. Beiträge zum Verständnis Maimunis und seiner Vorläufer*, in *Gesammelte Schriften*, Band 2, 14）。

ここでいう「急進的な啓蒙主義」とはスピノザに代表される思想を意味している。そして、シュトラウスにとってローゼンツヴァイクの〈新しい思考〉はユダヤ教の「正統派」の復興につながるはずであった。しかし詳しく述べることはできないが、ローゼンツヴァイクのユダヤ教への回帰は挫折を余儀なくされていたし、啓蒙主義による宗教批判も勝利をおさめたかどうかはきわめて疑わしかった。いずれにせよスピノザとローゼンツヴァイクという問題圏は、シュトラウスを通してわれわれを「啓蒙主義と正統派の論争」の取り戻し、すなわち〈近代〉そのものの「再理解」へと導いていくのである。

ローゼンツヴァイクの〈新しい思考〉から対話の倫理や現代思想の萌芽を取り出すこと、〈新し



フランツ・ローゼンツヴァイク
（Internationale Rosenzweig-Gesellschaftより提供）

い思考〉を彼が生きた「危機」の時代に配置し直し、さらにはスピノザ以来の近代ヨーロッパならびにユダヤ思想史のなかに再定位すること——どの試みも正当なものである。とはいえ、いまやつとわが国で読み始められた〈新しい思考〉、そして『救済の星』がどのように輝きだすかは、当然のことながらその解釈者の腕にかかっているといえよう。

〔参考文献〕

- Fricke, Martin. *Franz Rosenzweigs Philosophie der Offenbarung: Eine Interpretation des Sterns der Erlösung*. Würzburg: Verlag Königshausen & Neumann GmbH, 2003.
- Kohr, Jörg. »Gott selbst muss das letzte Wort sprechen...« *Religion und Politik im Denken Franz Rosenzweigs*. Freiburg/München: Verlag Karl Alber, 2008.
- Löwith, Karl. "M. Heidegger und F. Rosenzweig: Ein Nachtrag zu *Sein und Zeit*," in *Sämtliche Schriften*, Bd. 8, *Heidegger-Denken in dürftiger Zeit*. Stuttgart: J. B. Metzler, 1984.
- Putnam, Hilary. *Jewish Philosophy as a Guide to Life. Rosenzweig, Buber, Levinas, Wittgenstein*. Bloomington/Indianapolis: Indiana University Press, 2008.
- Rosenzweig, Franz. *Der Mensch und Sein Werk: Gesammelte Schriften II: Der Stern der Erlösung*. Haag: Martinus Nijhoff, 1976. 『救済の星』(村岡晋一・細見和之・小須田健訳、みすず書房、2009年)。
- . "Das neue Denken," in *Der Mensch und sein Werk: Gesammelte Schriften III: Zweistromland: Kleinere Schriften zu Glauben und Denken*. Haag: Martinus Nijhoff, 1984. 「新しい思考——『救済の星』に対するいくつかの補足的覚書——」(合田正人・佐藤貴史訳、『思想』No. 1014、岩波書店、2008年10月)。
- . *Das Büchlein vom gesunden und kranken Menschenverstand*, herausgegeben und eingeleitet von Nahum Norbert Glatzer. Athenäum: Jüdischer Verlag, 1964.
- Strauss, Leo. *Philosophie und Gesetz. Beiträge zum Verständnis Maimunis und seiner Vorläufer*, in *Gesammelte Schriften*, Band 2, Philosophie und Gesetz – Frühe Schriften, herausgegeben von Heinrich Meier (Stuttgart: Verlag J. B. Metzler, 1997) .
- 合田正人『週間読書人』(2009年6月19日)。
- . 「哲学の終焉と新しい思考」『思想』(岩波書店、No. 1023、2009年7月)。
- 佐藤貴史「瞬間と解体——H・コーエンとF・ローゼンツヴァイクにおける啓示と倫理——」(『聖学院大学総合研究所紀要』第42号、2008年)。
- . 「現実性と真理——フランツ・ローゼンツヴァイクの経験論——」(『宗教研究』第358号、日本宗教学会、2008年12月)。
- スタイナー、ジョージ『マルティン・ハイデガー』(生松敬三訳、岩波書店、2000年)。
- 早尾貴紀「他者との共生の思想的先駆」『環』(藤原書店、Vol. 38、2009年)。
- 三島憲一『図書新聞』(2009年8月1日)。
- ミュラー＝ドーム、シュテファン『アドルノ伝』(徳永恂[監訳]、作品社、2007年)。
- 村岡晋一『対話の哲学 ドイツ・ユダヤ思想の隠れた系譜』(講談社、2008年)。
- . 「訳者あとがき」『救済の星』(村岡晋一・細見和之・小須田健訳、みすず書房、2009年)。
- (さとう・たかし 聖学院大学総合研究所特任研究員)